



# 北見の歴史

あれこれ

No.64

田丸 誠

## 結核と 北海道立北見療養所

三月二十四日は「世界結核デー」です。この日はロベルト・コッホが明治十五年（一八八二）に結核菌の発見を発表した日で、平成九年（一九九七）に世界保健総会で世界中の人々が結核根絶への誓いを新たにし、一体になって取り組むために制定されました。結核は今も貧困な国々で猛威をふるい、全世界で年間九六〇万人が発病し、一五〇万人が死亡していると推定されています。我が国も例外でなく、高齢者の発病が問題になっています。

結核は弥生時代に大陸から日本に持込まれ、明治時代になって爆発的に蔓延しました。その温床になったのが、富国強兵政策の核だった工場と軍隊でした。製糸工場の劣悪な労働環境で結核に罹り、首になった女工達は故郷に帰り、感染を拡大しました。その他の工場に働く職工達も同様でした。軍隊では狭い兵舎で結核に集団感染し、発病、帰郷、地方に拡散しました。昔は結核の有効な治療法がなく、「不治の病」と言われ、金持ちはサナトリウム（長期療養所）での自然治癒に望みを託しましたが、貧乏人は病人を物置等に隔離して死ぬのを待つだけでした。戦時中は栄養不足が常態化し、昭和十八年（一九四三）の全国統計で死因第一位は結核で一七万人余が死にました。その後は統計が全くなく、二十一年の結核死亡者は二〇万人と推定されています。二十二年に再開された統計では結核死亡者は一四万人余となりました。この死亡者減少は終戦前後の食料不足で多くの患者が死亡した「過剰死亡」の結果だと考えられています。

アメリカで昭和十九年に結核の特効薬、ストレプトマイシンが開発され、戦後輸入され、劇的な効果を発揮しましたが、庶民の手が届かない大変高価な薬でした。二十六年社会保険適用、同年十月より結核予防法で公費負担となり、庶民もストレプトマイシンによる効果的な治療を受けられるようになりました。

戦後の当市も当然結核患者が多く、筆者が幼かった昭和二十五年頃でも、ご近所で若い人が何人も結核で亡くなった記憶があります。新聞でその頃のことを調べると、昭和二十六年の調査で当市の死因第一位は結核で、死亡率（対一万人）は三三・九で、全道一五市中七位とありました。因みに最悪は岩見沢の三四・四、次が帯広で三三・九、三位は旭川で二七・三、四位函館二七・二、五位釧路二六・〇、六位稚内二四・三でした。



結核罹患者数が推定一萬五千人を越えた北見・網走・美幌地区で治療機関誘致運動が強力に展開された結果、昭和二十六年十月に当市の、現在は緑のセンターがある、緑ヶ丘の斜面一帯に結核療養の「北海道立北見療養所」（病床数・結核二五〇床）が落成しました。治療を要する患者が沢山いたので、翌二十七年一月十日に病床五三床で急ぎ開所されました。

当時は肋骨を切り取る胸郭形成術等の危険な外科手術が行なわれて、手術中に死ぬ人もおりました。上の写真は同療養所の全景です。

恐れられた結核も、BCG（結核予防生ワクチン）接種、特効薬の開発や診断技術の発達で初期治療が可能になり、療養所入所患者は減り、昭和四十年十月に病床を一般二二床、結核二〇〇床に変更し、四十六年十月から心臓外科治療を開始、同年十一月の機構改革で療養所は「北海道立北見病院」となりました。